

## セリオーツ

湖畔の白樺に秋色の薄衣<sup>うすぎぬ</sup>

澄明な故に不可思議な朝<sup>あした</sup>に承露とならむ

その五体に染み渡り、哀しみとなるとも  
なおこの彩りの情景より立ち去るに能はず  
むしろ摩滅した感性を情けなくもてあそぶ

然れども来るべき季節の足音に耳を澄ませば  
橋の上より覗き込んで恐怖に震撼す  
私を連れ去らんとする悲愴の抒情の  
迫り来るを知らせる途切れ途切れの微風が  
野守の鏡に映る穏やかな構図を時折揺るがす様に

逃れ難き運命ならば立ち向かう力を与え給え  
凍えるが如き寂寥にそぞろ歩くこの焦燥の代りに

かつて降りしきる雪の中に一瞬<sup>よ</sup>過ぎった  
清冷な希望と暖かな幻影にも似たものを  
この掌に入るほどのほんの微笑な力を

既に染まり始めた広葉樹は斜陽を通し  
紅と黄金の淡い光を私は浴びて立つ  
惨めにも激しい咳にうずくまるこの身体を  
なお、愛すべきこの世界の中に留めさせ給え  
再び春の暖かな陽射しを浴びさせ給え

(1984.10.10)